



自由投稿



総合地質 3 巻 1 号

Published by Hokkaido Research Center of Geology

札幌の失われた川を尋ねて

宮坂 省吾¹⁾

2019 年 6 月 3 日受付

¹⁾ 北海道総合地質学研究センター

Hokkaido Research Center of Geology

連絡先：札幌市東区中沼町 29 番地 283

Nakanuma-cho 29-283, Higashi-ku, Sapporo City, Hokkaido 004-0064, Japan,

miyasaka@hrcg.jp

はじめに

「札幌の失われた川」についての拙文は最初に北海道自然保護協会の会誌「北海道の自然」第 55 号（2017 年 2 月）、次いで「水の都札幌」に関する拙文が『総合地質』創刊号（2017 年 12 月）に掲載された。

それらが地質学会会長（元）・秋山雅彦さんの目にとまり、同氏の支援により 2019 年 1～2 月の札幌市中央図書館でのパネル展、次いで 4～6 月の北海道大学総合博物館での「地質の日」記念展示が実現した。

そもそも「札幌の失われた川」を調べてみようと思い立ったのは、在田さんを実行委員長とする 2011 年「地質の日」記念展示「豊平川と私たち」準備の時だ。アイヌ語地名や古地図を含めて、札幌の川に関する諸資料・諸説の整理が必ずしも十

分ではないことを感じたのだ。

そこで、アイヌ語地名に関する金字塔『札幌のアイヌ地名を尋ねて』（山田秀三 1965）を熟読し、札幌の河川変遷史を理解しようと試みた。それが、「失われた川を尋ねる」旅の第一歩だった。

1. 「水の都札幌」展示の経緯とイベントの概要

2018 年 4 月に秋山さんから、「水の都札幌」をテーマに講演とパネル展示をやらないかと打診された。その頃「札幌の地名のわかる本」の分担執筆を脱稿し、肩の荷は半分ほど下りていたので喜んで引き受けた。

札幌市中央図書館でのパネル展示は、サイエンス・コンソーシアム札幌主催「失われた川を尋ねて『水の都』札幌」と題して実施された（2019 年 1 月

10 日～2 月 12 日）。入場人数は 4800 人余りとカウントされ、筆者は予想外の観客数に驚愕した。

これを見た秋山さんから北海道大学などで公開展示を依頼したらどうかとの進言を頂き、在田さんに相談したところ、「地質の日」記念行事の一環として北海道大学総合博物館で展示（4 月 27 日～6 月 16 日）を行うことになった（図 1）。

その一連の行事、土曜市民セミナー『『水の都』札幌—コトニ川を尋ねて—』は博物館「地の交流」ホールを埋め尽くす聴衆が集まり、北大の考古学者・人類学者も聴いて下さった。また、市民地質巡検「街中ジオ散歩 in Sapporo 『コトニ川を歩く』」は定員を超えた参加者と札幌にしては暑い市内を北大から植物園を歩き、さらに大通

西 8 丁目「鯨の森」と呼ばれた春楡林まで“消え去った川”を案内した。

途中の川の畔にアイヌ・コタンがあったことは、昨年暮れに歴史学者の論文に公表されている。そこも、札幌市中央図書館での展示の際に見つけたチセ（アイヌの家屋）の古写真とともに紹介した。



図 1. 2019 年「地質の日」記念展示のポスター（北大総合博物館 谷地中大介係長製作）。

以上のイベントは、筆者にとっては望外の盛況であった。講演や説明はしどろもどろであったが、タイトルに興味をもった方々は懸命に聞いて下さったのではないかなと思う。その出発点に『総合地質』創刊号に拙文の掲載を許された君波和雄編集長ほかの皆さまのお計らいがあったことに、あらためて深謝するものである。

2. 明治時代に残っていた川の名

札幌の川名は、17 世紀中頃以降に和人の探検家あるいは旅行者が聞き書きした、アイヌ語地名が知られている。

明治時代の中頃に函館懸令および北海道庁長官の命令により全道を 8 年ほどかけて調査し、アイヌ語地名が集大成された（『北海道蝦夷語地名解』（永田方正 1891）。山田秀三は、この書を「不朽の名著」と評したが、それは永田が「凡そ一万」のアイヌ語地名を網羅したからだ。永田は、旧記の誤謬を訂正したほか、聞き取りの注意書きを丁寧に記している。しかし、この書は位置情報を欠き、後に

山田（1965）が「アイヌ語の名の場所の見当がつかないので、まるで未知の国の話のようだ」と記すことになった。

ところが、山田は挫折しなかった。アイヌ語地名のほとんどが地形に因んで付けられていることに着目し、「土曜と日曜の散策に」地図とカメラを携えて、それらしい場所を求めて歩いた。そして全道各地の同系地名と照合して意味を再検討していった。こうして「メモの、資料としての羅列」を一冊の本として楡書房が出版したのは 1965（昭和 40）年、いまから 54 年前の夏である。この本は、ほんとうに「煩雑で、読みづらい」が随所に圧倒的な示唆が含まれている。（この段落内の「」は著者による）

3. 失われた川を尋ねる旅

その後、札幌の河川は都市化の拡大とともに自然の姿をほとんど失ってしまった。このよ

うな時代には、山田（1965）の煩雑な記述を整理することに加え、わずかに残った川の痕跡を確認し、古地図と古写真を含めた資料を創ることが必要ではないかと、筆者は考えた。

山田は 1992 年の夏に逝去、92 歳であった。その後、1997 年にアイヌ語地名研究会が発足し、翌年から会誌が発行されている。その巻頭で榊原正文が豊平川についてユニークな主張を展開し、山田を超える展開が始まっていた。

古地図と古写真を収集して川跡を地形学的に観察すると、山田の世界の一步先にある重層的な風景が浮かんでくる。それは数百年という時間スケールでの川・豊平川扇状地と石狩湿原の変遷に迫るものである。

3-1. 札幌の失われた川

それは開拓使の札幌本府建設によって消え去った川の検討からも、明らかに理解される。

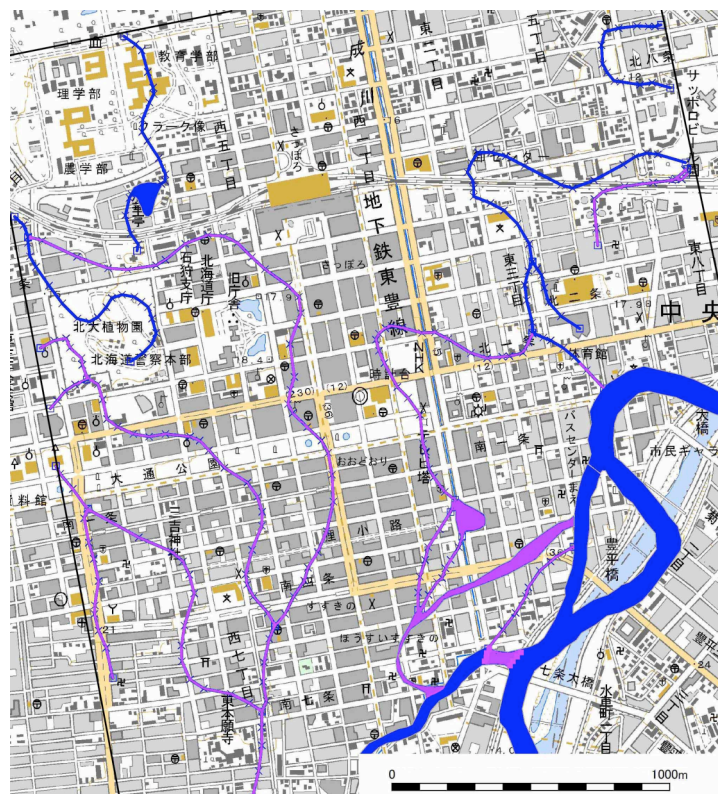


図 2. 1872（明治 5）年頃の古河川。紫塗色は明治 29 年版 5 万分の 1 地形図では描かれなかった“消えた川”。（『明治 4 年及 5 年札幌市街之図』の川筋を「国土地理院「2 万 5 千分 1 ウォッチーズ」」に描いた（関根達夫氏提供）。

図 2 の古河川は 1897(明治 30) 年発刊『札幌沿革史』に付された古地図に記された川筋を最近の 2 万 5 千分の 1 地形図に被せたものである。

現在の札幌中心街は開拓使の本府にほぼ相当するが、20 年ほどの期間にすべての川が消え去ったことが分かる(図 2 の紫線)。アイヌ語を伝承した人たちは本府から遠ざけられ、アイヌ語収集の和人たちは消えた川に注目することもなかっただろう。

地図資料は開拓使時代の 1 枚のみであるが、『札幌沿革史』には市街での川筋の案内が付されている。現在、それらの川の復元は十分では無いように思われ、さらなる収集が望まれる。

3-2. 失われた川の例

ほかにもそのような例がある。それは、円山村などに開拓に入った和人によってヨコシベツ(あるいはヨコチベツ)と呼ばれた川で、円山川あるいは界川の旧名であった。

山田は引用しなかったが、『札幌沿革史』にはヨコシベツ川(いつも獲物を狙う川)は藻岩山から流れだし、豊平川扇状地の西縁を北流した川と記していた。

筆者は、山鼻から流れてくる川は“ほとんど消えてしまった”ため、支流に当たる円山川や界川のみをヨコシベツ川と呼んだかもしれないと考えている。歴史学者・高倉新一郎も山田にそのことを伝えたと言う。

放っておくと、このようにして古くからの川と、その名は忘れられていく。

ところが上流の山鼻の人たちは、大正時代、この川を「溪流 伏見川」と呼んでいたらしい。その名からすると、清流で速い流れだったのではないだろうか。これがヨコシベツの本

流が残っていたことを示す、僅か一行の文章であった。しかし、ほかにはない貴重な記述であると思う。

その 60 年余り後、ヨコシベツ川は涸れていたが、1981(昭和 56)年札幌大洪水の時に川跡やメムなどの埋立地で床上浸水等が発生して大騒ぎになったと言う。ヨコシベツ川は断たれておらず、はるか上流の藻岩下地区にあった扇頂域から伏流水がつながっていて、ところどころで噴き出したのだ。「失われた川」の怨念は恐ろしい、と語った人がいる。

3-3. 絵図や地形図による情報の整理

札幌の河川は、1750 年頃『飛騨屋久兵衛石狩山伐木図』に始めて詳細に記載された。100 年ほど後になって、川名と川筋の記載が松浦武二郎によって全道にわたってなされた。これらの川筋と 5 万分の 1 地形図などの照合は山田が完了させた。平成の時代にアイヌ語地名研究会によった方々は、各地について詳らかにしている。

しかし、それはアイヌ語地名に示される単一の時間断面の

地名情報で、地名を定めた地形情報の変遷は別のアプローチが必要だろう。もちろん山田を含めたアイヌ語地名研究者は河川争奪による豊平川の流路変更や、その後に消え去った河川について見解を述べ、多くの示唆を与えている。

しかし、筆者は地質学者の眼を使って江戸時代以来の絵図や地形図をチェックし、川筋や湿原・河川の様子を復元してみたいと思っている。特に、扇状地や湿原については注意深い検討が要求されるだろう。

3-4. 古河川復元の例

図 3 は 200 年ほど前の札幌の河川を描いたものである。図の中央部が扇状地で、その西端をヨコシベツ川が流れている。

ここで、中央部には川筋が見当たらないことに注意して貰いたい。そこは古い扇状地なので河川は無く川跡が残っているだけだとも言える。

しかし、ヨコシベツ川は前述したように大正時代には清流だったし、「原サツポロ川」と付した青波線で示した川は、明治時代には融雪時には流れる水無川だったらしい。そうする

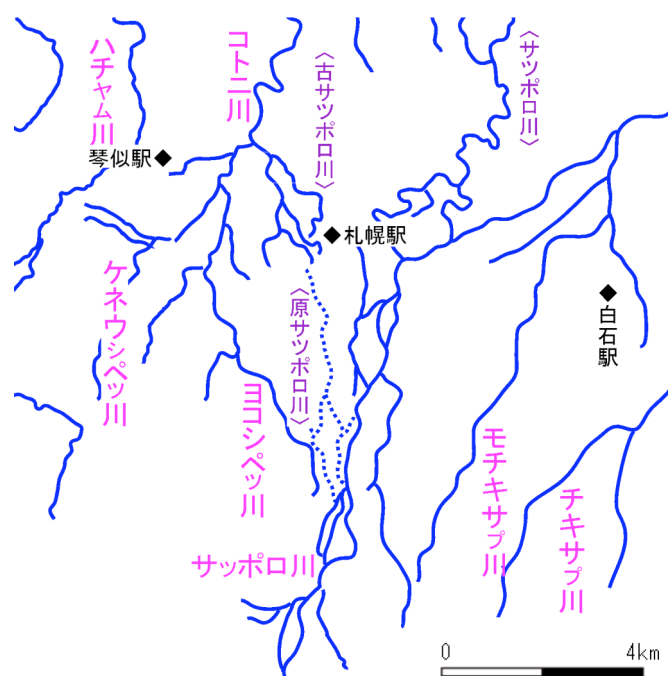


図 3. 西暦 1800 年頃を想定した古河川図 (2019 年 5 月私案)。

と、図 3 は西暦 1800 年を想定した河川図だから、原サッポロ川は「波線ではなくて」実線で示さなければ間違いだと言うことになる。

仕事は、始まったばかりである。このような古河川図を必要なイベントに合わせて作成したいと考えている。

おわりに

今から 150 年前に始まった札幌の開拓は、アイヌの人たちの生活を奪ったうえ、川も無くしてしまった。山田秀三のアイヌ

語地名を尋ねる仕事は、失われた自然の復元の旅でもあった。

その思いに触れてみようと資料や写真を集めてみると、その風景と成り立ちが見えたような気もする。

勘違いは多いかもしれないが、山田秀三の教えに従い、「判らなかった事」をちゃんと説明し、「写真を撮り、地図に書き入れ」、一冊の本にしたいと準備を進めているところである。みなさまのご指導やご協力を、心よりお願いします。

<参考文献>

永田方正, 1892, 北海道蝦夷語地名解. (復刻 1972 国書刊行会), 498 頁.

山田秀三, 1965, 札幌のアイヌ地名を尋ねて. 楡書房, 176 頁.

山田秀三, 1984, 北海道の地名. 北海道新聞社, 586 頁.

札幌史学会, 1897, 札幌沿革史. (復刻 1979 北海道出版企画センター), 256 頁.